

れきふねがわ
歴舟川水系河川整備基本方針

平成13年8月

北 海 道

歴舟川水系河川整備基本方針

目 次

1. 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針	1
(1) 流域の概要	1
(2) 治水の現況	1
(3) 河川の利用の現況	1
(4) 流域の自然環境	1
(5) 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針	2
2. 河川の整備の基本となるべき事項	3
(1) 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設等への配分に関する事項	3
(2) 主要な地点における計画高水流量に関する事項	3
(3) 主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る川幅に関する事項	4
(4) 主要な地点における流水の正常な機能を維持するために必要な流量に関する事項	4
(参考図)	
歴舟川水系 流域概要図	5

1. 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

(1) 流域の概要

歴舟川は、その源を北海道広尾郡大樹町の日高山脈に発し、歴舟中の川、ペンケタイキ川、振別川、メム川等の支川を合わせ、太平洋に注ぐ、流域面積558.5km²、幹川の流路延長64.7kmの二級河川である。

河川の名は、一説によると、アイヌ語のペ・ルプネイに由来し、「水大きくなる川（嵐又は西南の風吹く時は急に出水する）」の意と言われている。

流域は大樹町に位置し、その土地利用は約70%が山林であるが、中下流部の平地には畑、牧草地などが広がり、中流部の大樹橋周辺には市街地が形成されている。

また、流域の上流部は日高山脈・襟裳国定公園に指定されている。

(2) 治水の現況

歴舟川の治水としては、昭和39年の集中豪雨を契機として、大樹町市街地部である大樹橋から上流部において築堤、護岸による河川改修を実施している。その後、昭和47年9月の台風により、床下浸水41戸、床上浸水44戸、家屋全壊10戸に及ぶ多大な被害が発生したことから、計画規模を見直し、昭和48年より大樹橋上下流の市街地部において築堤、掘削による河川改修に着手し、昭和57年に終了している。

(3) 河川の利用の現況

大樹町は、歴舟川の砂金採取から370年を経て、大地の開発と歴舟川の改修とともにできあがったまちで、現在この歴舟川の清流を活かしたまちづくりを行うなど、大樹町の人々の日常生活と深いつながりをもっており、住民からも良好な景観や環境を活かした整備が望まれている。

水利用としては、水道用水として利用されているほか、工業用水、養魚用水として利用されるなど大樹町の水源となっている。歴舟川の流況は、昭和48年～平成9年の観測によると尾田橋地点において最低濁水流量が0.22m³/sで、過去に濁水被害が生じた事例はない。また、十勝支庁管内におけるさけ増殖事業の重要な河川として位置づけられ、サケのふ化放流が行われており、河口付近では成魚の捕獲事業が行われている。

河川空間の利用については、上中流域には坂下仙境や神威古潭の景勝地があり、砂金掘体験所やオートキャンプ場に利用され、中下流域の高水敷は、左岸はスポーツや清流祭りの場として、また、右岸はパークゴルフ場として利用されており、住民の憩いの場となっている。

(4) 流域の自然環境

歴舟川流域の気候は、年間を通じて寒暖の差があまりみられず、涼しい気候といえる。流域の年間降水量は道内では比較的多い方で約1,700mmとなっている。

流域の地質は、上流部の日高山脈は片状ホルンフェルス、片麻岩が分布するほかは、大半が中世代から第三紀の頁岩質粘板岩と砂岩によって占められている。また、中流部より下流には、第四紀の礫、砂、降下火砕堆積物が分布している。

歴舟川流域は日高山系連山含む優れた自然環境にあり、自然豊かな北海道屈指の清流河川として地域住民に親しまれている。その上流部はエゾイタヤ、シナノキなどが広く分布し、エゾシカやキタキツネ、オジロワシ、オオワシなどが生息する豊かな森林に囲まれ

た溪谷の中を流れ、大樹町市街地に至るまで原始の姿そのままに清流が流下している。河道は、急流河川であるため早瀬と淵が連続し、ヤマメやニジマスなどが生息しており、これらを捕食するカワセミなどの姿も見られる。河岸付近にはケショウヤナギ、オノエヤナギなどのヤナギ類が優占する河畔林が連続しており、小河川との合流部などのたまりでは、エゾサンショウウオなども確認されている。

大樹町の市街地が位置する中流部は、河川改修により堤防が設置され、河岸は護岸が施工されているが、中州が形成され、カモの集団越冬地となっているほか、水際の流れの緩やかなところには、スナヤツメ、イバラトミヨ、イトヨなどの生息が確認されている。また、夏場は清流祭りやイカダ下りなどのイベント会場として利用されており、地域住民に広く親しまれている。

大樹町市街地から河口までの下流部は、川幅が広がり砂州が網状に形成され、河岸にはケショウヤナギなどの大規模な河畔林が広がり、広大な平野の中を雄大に流れ太平洋に注いでいる。河床は急勾配で、河口部においても比較的粒径の大きな礫や玉石で形成されており、サケ、アメマスなどの遡上も見られ、河原はイカルチドリ、セグロキセキレイなどの水浴びや採餌を行う空間となっている。

歴舟川の水質は、近年調査の結果、全川にわたりBODで0.5mg/ℓ以下と非常に良好な水質が保たれている。

(5) 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

河川の総合的な保全と利用に関する基本方針は、水害の発生状況、治水事業の経緯、河川の利用状況ならびに河川環境を考慮するとともに、既存の利水施設等の機能の維持に十分配慮して、水源から河口まで一貫した計画のもとに、次のとおりとする。

災害の発生の防止又は軽減に関しては、歴舟川流域の社会・経済的な重要度と道内の他河川との計画規模の整合を図りつつ、概ね50年に1回の確率の降雨で発生する規模の洪水の安全な流下を図る。

計画規模を上回るような洪水に対しては、水防管理者等の関係機関へ河川情報等の伝達体制整備を行い、被害の軽減を図る。

河川の流水の正常な機能の維持、河川環境の整備と保全及び河川の適正な利用に関しては、大樹町の水道用水として利用されている状況を踏まえ、河川情報の提供など関係機関と協力し、適正な水利用が図られるよう努めるものとする。また、良好な水質や自然豊かな河川である現状を踏まえ、水量・水質など河川流況の把握を行い、流水の正常な機能の維持に努めるものとする。

原始の姿そのままに清流が流下している上下流部においては、ヤマメ、ニジマスなどの生息する瀬・淵、水際まで繁茂しているケショウヤナギ等の河畔林及びカワセミの生息する河岸の崖地などの良好な動植物の生息・生育環境が形成されており、これらに対し、適切な保全措置を講じることや、水質及び景観等に配慮することにより、現況の良好な河川環境の保全に努める。

大樹町市街地を流れる中流部においては河川を利用したイベントが開催されるなど、地域住民の日常生活と深いつながりをもっている河川であり、景観や環境を活かした整備が望まれていることから、河川環境を身近な自然として地域住民が川にふれあい親しむことができる水辺空間を提供していくものとする。

河川の維持管理については、自然豊かな河川として地域住民に親しまれている現状を踏まえ、災害の発生の防止、河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持、河川環境の保全と整備等、総合的な観点から必要な措置を講じるなど、適切な実施に努めるものとする。

2. 河川の整備の基本となるべき事項

(1) 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設等への配分に関する事項

基本高水のピーク流量は、概ね50年に1回の確率の降雨で発生する規模の洪水を考慮して、大樹橋基準地点において、 $2,600\text{m}^3/\text{s}$ とする。

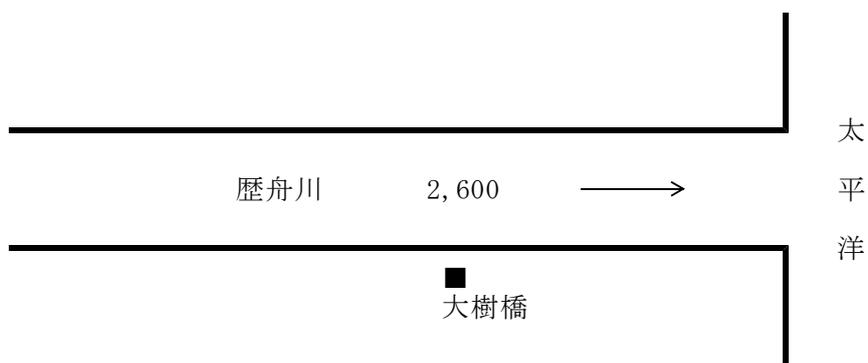
基本高水のピーク流量等一覧表

単位： m^3/s

河川名	基準地点名	基本高水のピーク流量	洪水調節施設等による調節流量	河道への配分流量
歴舟川	大樹橋	2,600	—	2,600

(2) 主要な地点における計画高水流量に関する事項

歴舟川における計画高水流量は、大樹橋地点において $2,600\text{m}^3/\text{s}$ とする。



計画高水流量配分図 (単位： m^3/s)

■：基準地点

(3) 主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る川幅に関する事項

本水系の主要な地点における計画高水位及び概ねの川幅は次表のとおりとする。

主要な地点における計画高水位及び川幅一覧表

河川名	地点名	河口からの距離 (km)	計画高水位 T.P. (m)	川 幅 (m)
歴舟川	大樹橋	12.9	+67.73	260

(注)T.P. : 東京湾中等潮位

(4) 主要な地点における流水の正常な機能を維持するため必要な流量に関する事項

尾田橋地点より下流における既得水利としては、工業用水などとして約 $0.15\text{m}^3/\text{s}$ の許可水利がある。また、尾田橋地点における過去24年間（昭和48年～平成9年）の平均渇水流量は約 $4.03\text{m}^3/\text{s}$ 、平均低水流量は約 $8.48\text{m}^3/\text{s}$ である。なお、過去に渇水被害が生じた事例はない。

歴舟川における流水の正常な機能を維持するため必要な流量については、今後、流況等の調査を引き続き行い、利水の現況、動植物の保護、流水の清潔の保持等を考慮して定めるものとする。

歴舟川水系 流域概要図

位置図



凡例

	流域界
	国道
	基準地点

